『軽い男じゃないのよ』

監督：エレオノール・プリア
出演：ヴァンサン・エルバズ、マリー＝ソフィー・フェルダン、ピエール・ベネジット
2018年／フランス／98分

Netflix 映画
『軽い男じゃないのよ』
独占配信中

予 告

社会を旅するシネマ
きっと もっと 近くなる
きっと もっと 知りたくなる

男女逆転した世界で浮き彫りになる男性の優位性と有害性

アーヤ藍

主人公のダミアンはいわゆる女たらし。褒め言葉を装ったセクハラまがいの発言は日常茶飯事。街ですれ違う女性たちを物色するように見つめ、会社の会議でもセックスの回数と相手の属性などを記録する「ペニスメーター」なるアプリを恥ずかしげもなく提案する。マチズモの塊のような男性だ。

だがある日、女性に目線を送っていて標識に気づかず激突。目が覚めると、そこは男女が逆転した世界だった。街を見渡すと、救急隊員やごみ収集員やバーのマスターなど、男性が多かった職種をすべて女性が担っている。会社に行けば、デスクに座っているのは女性ばかり。男性はというと受付やお茶運びなどの雑用係。しかも胸元が深く開いているシャツやお尻がぎりぎり隠れるぐらいのショートパンツを履いている。新生児が生まれたばかりの友人夫妻の家を訪れると、育休中の夫が家事と育児に追われ、妻は一切手伝うことなくテレビでサッカーを悠々と鑑賞している。挙げたらきりがないほど細部まで「逆転」の描写が徹底されていて、「そんなところまで！」と思わず笑ってしまうが、同時に現実社会がいかに男性の優位性や加害性に溢れているかに気づかされ、ぞっとする。

もうひとつ本作のおもしろさであり恐ろしさは、そんな逆転世界を経験したダミアンが過去の自分の行動や価値観を反省する……という勧善懲悪的な展開ではない点だ。むしろ当初ダミアンは喜んでさえいる。女性から「笑顔がかわいい」と声をかけられたり、女性の上司に企画を通してあげるからと性的関係を求められたりするのは、女たらしのダミアンからすれば願ったり叶ったりだからだ。

次の段階では「適応」もしていく。女性から「毛の処理をしていない男は生理的に無理！」と拒絶されたのを受けて、頑張って脱毛し、いつの間にか生足を見せつけるようなショートパンツを自ら履くようになる。根強い社会通念のもと上手に世渡りするには順応を選ばずにはいられないのも、現実社会の女性たちのリアルではないだろうか。

一方で次第にダミアンも、誘ってくる相手は自分を見下し、「消費」あるいは「支配」の対象として見ていることを理解していく。「男性も対等で自立した人間だ」と周りに訴えていくが、それも「マスキュリストの妄言だ」と女性はもちろん男性からも馬鹿にされることに……。

誰もが子どもの頃一度は「自分がやられて嫌なことは、ひとにやってはいけない」と言われたことがあるのではないかと思う。だが大人になるほどに、属性や環境によって「嫌」に感じる範囲は千差万別になる。だから個人の想像力に期待を寄せるだけでは暴力や悲劇を防ぐことはできない。某テレビ局の性暴力を軽視した対応の詳細が明らかになったばかりの中で本稿を書きながら、そう強く思う。せめて本作を通じて女性が味わっている日常の一端を男性に「擬似体験」してほしい。

あーやあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題に関わる映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル（株）に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』（春眠舎）。